

# 博物館 NEWS

## ニュース

(C)1954 TOHO・TOHOEIGA

### ゴジラ

日本を代表する特撮映画キャラクターであるゴジラ。その誕生は1954年11月のことでした。ゴジラはもともと、深海で生きのびていた約1億4000年前の恐竜でしたが、度重なる水爆実験によって眠りからさめ、水爆エネルギーを全身に充満させた巨大怪獣ゴジラとなって人類に襲いかかるのでした。

この年、太平洋のビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験により、地元住民や漁船が「死の灰」を浴びました。とくに大きな実験が行われた3月、日本のマグロ漁船第五福竜

丸が被爆し、日本中に衝撃が走りました。アメリカ、ソ連の冷戦のもとでの核開発競争の生んだ悲劇でした。そして、ヒロシマ・ナガサキに続く、この3度目の核兵器による被害をきっかけに原水爆禁止運動が高まります。ゴジラは、こうした核開発と反核のうねりのなかで登場したのです。

企画展「世紀末大博覧会」(10月20日～11月26日)では、核に翻弄された20世紀後半の世界の象徴としてゴジラ関係資料を展示します。  
(長谷川賢二)

# 岩蔭遺跡の調査

高島芳弘

はじめに

日本列島における人類の起源は、最近の研究によると50万年以前に遡ることが確実になってきました。そして、岩手県岩泉町のヒョウタン穴の調査のように、旧石器時代の人骨の発見を大きな目標として、岩蔭・洞穴遺跡の調査がさかんに行われるようになりました。

日本の岩蔭・洞穴遺跡の調査といえば、40年近く前に行われた日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会による、縄文時代を中心とする岩蔭・洞穴遺跡の集成が、まず思い起こされます。

中四国では、この集成の時にも取り上げられた愛媛県の上黒岩岩蔭遺跡と40年以上調査の続く広島県の帝釈峡遺跡群とが、山間地域の岩蔭としてとくに有名です。最近になって、高知平野中央部で、岩蔭遺跡を含む奥谷南遺跡から旧石器時代～縄文時代早期の資料が発掘されました。立地の問題も含めて、ふたたび岩蔭遺跡が注目されています。

## 県内の岩蔭遺跡

徳島県の岩蔭遺跡は、1922年(大正11)に鳥居龍蔵が城山貝塚を発掘して以後、長い間調査されませんでした。1960年代になってふたたび注目されるようになりました。那賀郡上那賀町古屋の古屋岩蔭遺跡と、三好郡三加茂町西庄の加茂谷川岩蔭遺跡群とが調査されました。

古屋岩蔭遺跡は那賀川の支流古屋谷川に面しており、石灰岩の岩塊を底とします。標高約260

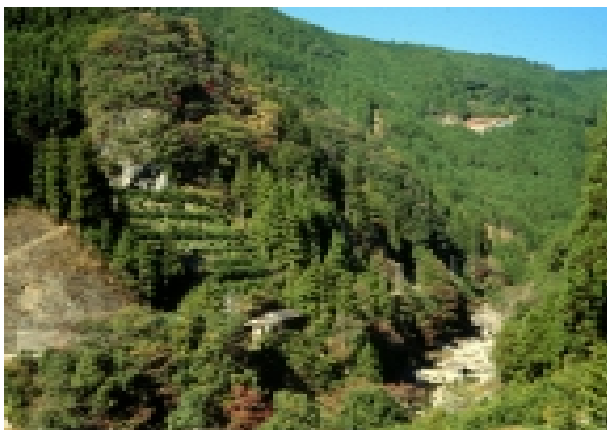


図1 那賀郡上那賀町古屋岩蔭遺跡

m、古屋谷川沿いの林道からの比高は30mほどです。1965年(昭和40)の那賀奥自然調査で発見され、1967年(昭和42)4月に調査が行われました(図1)。貝類や哺乳類の骨などの動物遺存体とともに押型文土器、条痕文土器、無文土器、石鏃、楔形石器、スクレイパー、磨石、骨ヘラ及び骨角器未製品などが出土しています。押型文土器はいずれも外面に小さな山形の文様があり、1点だけは内面にも同じ文様があります。条痕文土器は内外面ともに斜め方向の貝殻



図2 古屋岩蔭遺跡の出土遺物

条痕が施されています。1点は口縁部破片で緩やかな波状となっています(図2)。

加茂谷川岩蔭遺跡群は吉野川の支流加茂谷川沿いにあります。1970年(昭和45)から1973年(昭和48)にかけて加茂谷川1号(新田神社裏)、加茂谷川2号(新田神社裏)、加茂谷川5号(宝伝)岩蔭の発掘調査が行われ、合わせて流域全体の分布調査も行われました。縄文時代早期や前期の資料が多く出土しました。県内ではこの時期の資料はいまだに少なく、加茂谷川岩蔭遺跡群の土器は貴重な例となっています。

## 那賀川流域及び勝浦川流域における調査

徳島県立博物館では、1990年～1993年(平成2～同5)に『那賀川流域における縄文遺跡の調査』と題して那賀川、海部川流域の分布調査を行いました。岩蔭遺跡を探すことも調査の



図3 那賀川流域・勝浦川流域の岩蔭分布図

目的としました。1998年(平成10)には勝浦川流域で岩蔭の確認調査を行い、これに合わせて那賀川流域における岩蔭の追加調査もしました。これらの調査で那賀川流域と勝浦川流域において、今までの分と合わせて20カ所ほどの岩蔭群が確認されました(図3)。

- 1 那賀郡上那賀町白石
- 2 那賀郡木沢村木頭下田
- 3 那賀郡上那賀町拝宮谷
- 4 那賀郡木沢村木頭
- 5 那賀郡上那賀町大戸
- 6 那賀郡上那賀町古屋
- 7 那賀郡相生町内山
- 8 那賀郡相生町西納八面の谷
- 9 那賀郡相生町平野
- 10 海部郡日和佐町赤松、岩屋神社対岸
- 11 那賀郡鷺敷町氷柱観音
- 12 阿南市見能林町・長生町津乃峰山北斜面
- 13 勝浦郡上勝町旭岩屋坂

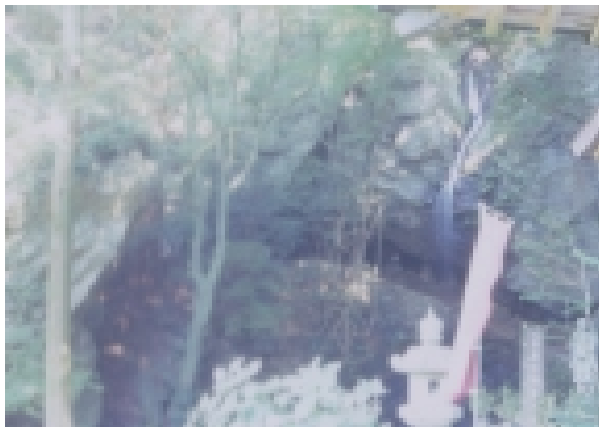


図4 勝浦郡勝浦町星谷野田尾 星ノ岩屋

- 14 勝浦郡上勝町福原吉ヶ平
- 15 勝浦郡上勝町正木灌頂ヶ滝
- 16 勝浦郡上勝町正木禅定ヶ屈
- 17 勝浦郡勝浦町星谷野田尾星ノ岩屋
- 18 徳島市飯谷町小竹
- 19 徳島市渋野町渋野の岩屋
- 20 徳島市論田町籠貝塚

これらのうち、12の津乃峰山頂の北斜面の岩屋群からは、石臼、石杵などが採集されており、20の籠貝塚からは古墳時代後期の須恵器及び土師器が採集されています。

遺物は採集されていませんが、遺跡として有望なところは、3の那賀郡上那賀町拝宮谷、8

の那賀郡相生町西納八面の谷、16の勝浦郡上勝町正木禅定ヶ屈と17の勝浦郡勝浦町星ノ岩屋(図4)の4カ所です。とくに那賀郡上那賀町拝宮谷には、バクチの岩屋、休み場の森岩蔭(図5)若宮権現岩蔭の3つの有望な岩蔭があり、どれも底のせり出し具合は雨露をしのぐのに最適です。岩蔭の岩塊はすべてチャートですが、バクチの岩屋には石灰岩の部分もあります。

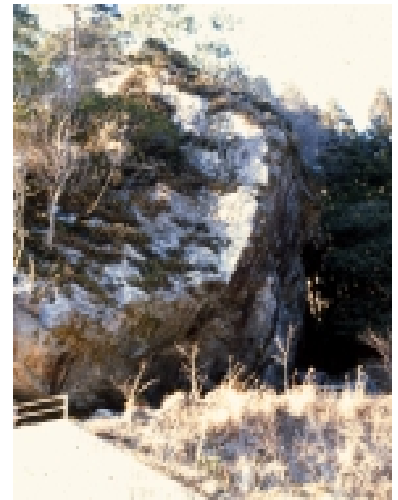


図5 那賀郡上那賀町拝宮谷休み場の森岩蔭

おわりに

ここにあげた20カ所は、那賀川及び勝浦川流域で確認された岩蔭のほんの一部でしかなく、まだまだ確認調査が必要だと思われます。さらに、岩蔭のうち有望そうな箇所の発掘調査を行わなければならないと考えます。岩塊の崩落により遺物が深く埋もれてしまっている可能性がひじょうに高いと思われるからです。

近くにある大きな岩屋を知っているという方は是非ご一報ください。貝殻などが散布していれば遺跡の可能性はより確実となります。

(専門学芸員:考古担当)

# 速報

## 1500万年前の魚の化石 ミヤノシタサツパ

鳥取市のすぐ南に位置する岩美郡国府町宮ノ下の新第三紀中新世中期の地層からは、たくさんの魚類化石が産出します。魚類化石の産地としては、ここは日本有数の場所です。中でも多いのがニシン科の化石で、この度、それがサツパ属の新種であることがわかりましたので、ご紹介します(図1)。学名は *Sardinella miyanoshitaensis* と付けました。これは宮ノ下のサツパという意味で、だから和名もミヤノシタサツパとしました。

サツパというと、皆さんはあまりなじみがないかもしれませんが、日本の内湾域ではごく普通にみられる魚です。瀬戸内海に面した岡山県では、酢漬けにしたものをママカリと呼び、珍重しています。徳島県内でもスーパーや土産物店で売られているのを見かけます。ミヤノシタサツパは、種こそ違いますが、このサツパと同じ仲間です。

この化石種を特定するのに、ずいぶんと苦労しました。お腹に稜鱗という鋭い棘をもった特殊な鱗があることや、体側の鱗に独特の「へ」の字型の模様があることなどから、すぐにニシン科の魚だとはわかったのですが、この後がなかなか進みませんでした。全世界の現生のニシン科の中には、5つの亜科に56属180種も含まれており、これらの骨格と比較しないと最終的に種を決めることができなかつたためです。

そこで図1のような全身丸ごとの状態で産出している化石だけでなく、骨がバラバラに散らばった化石も丹念に調べ(図2)、それらを顕微鏡の下で解剖した現生種や文献の記載と比較したりして、やっとサツパ属であると特定し、さらに現生種との違いを見つけました。その結果、化石のサツパでは、口の中にある内翼条骨という骨に歯板が発達していることや、体側鱗の微細構造が異なることがわかり、昨年12月に新種として発表しました。

おもしろいのは、サツパ属の中で、この化石のサツパともっとも似ている種は、現在日本の回りにいるサツパではなく、南太平洋の熱帯の島にいるマルケサスサツパ(仮称)だったことです。ミヤノシタサツパのいた中新世中期の日本列島は、現在とは様子がかかなり異なり、中国大陸のすぐ地先に生じた、小さな島々にすぎませんでした。当時は、かなり暖かい海が広がっていたようです。場所によってはマングローブが生えていたことから、現在の沖縄のような亜熱帯的な気候に近かったと考えられています。化石種のミヤノシタサツパと現生種のマルケサスサツパは、約1500万年の時を隔てても似たような気候条件の場所にすんでいたようです。

(動物担当：佐藤陽一)

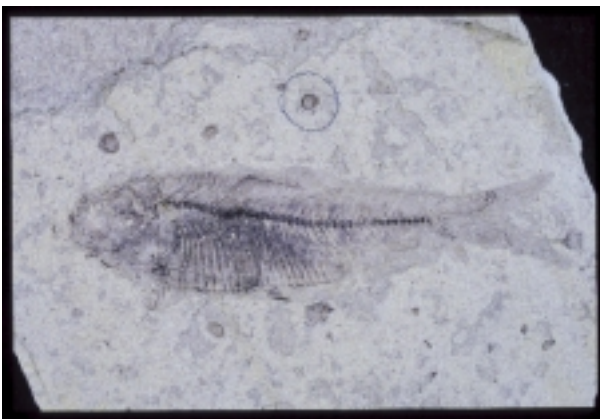


図1 ミヤノシタサツパの完模式標本(福井県立博物館所蔵)。分類学上の本種の基準となる標本です。



図2 ミヤノシタサツパの副模式標本の1つ(国立科学博物館所蔵)。化石魚の研究には、このような個々の骨を観察できる、1個体がバラバラになった標本も重要です。

文化の森総合公園  
開園10周年記念企画展

# 世紀末大博覧会

20世紀の最終年であり、21世紀への助走の年でもある2000年も残りわずかとなってきました。時代の転換が意識されたり、不安感と期待感が交錯する世相を踏まえ、この企画展では、歴史のなかの転換期文化や20世紀の歴史・文化、さらには未来イメージを取り上げ、全体として「世紀末」と「新世紀」の意味を考えてみます。

会期 10月20日(金)～11月26日(日)  
(月曜休館)

主催 徳島県立図書館・博物館・近代美術館・  
文書館・21世紀館

展示の構成

1号館 歴史のなかのミレニアム - 末法の精神誌(博物館企画展示室)

(1) 地獄と救済 (2) 祈りのタイムカプセル - 経塚

2号館 20世紀トピックス(博物館企画展示室・  
21世紀館多目的活動室)

(1) メディアのなかの20世紀 (2) 戦争と危機 (3) 「豊かさ」の光と陰 (4) 徳島の20世紀

3号館 未来へのまなざし(21世紀館多目的活動室・  
近代美術館ギャラリー)

(1) 海野十三が描いた未来 (2) こどもたちの21世紀像

観覧料 無料



上板町大山寺所蔵経筒  
(重要文化財)

関連行事(すべて参加無料!)

## 映画会「映画で見る20世紀」

日時 10月28日(土)・29日(日)  
11月4日(土)・5日(日)  
11月11日(土)・12日(日)  
11月25日(土)・26日(日)  
いずれも午後

会場 文化の森イベントホール

## こどもたちの21世紀像ギャラリートーク

日時 10月29日(日) 14:00～15:30  
会場 近代美術館ギャラリー  
講師 居上真人氏(彫刻家)

## 展示解説

日時 11月3日(金) 11:00～12:00  
11月12日(日) 14:00～15:00  
会場 企画展会場

## 記念講演会

日時 11月19日(日) 10:00～12:00  
会場 文化の森イベントホール  
講師 向井万起男氏  
演題 「女房が宇宙を飛んだ」

事前申込が必要です



なつかしのおもちゃ(竹とんぼ)



「こどもたちの21世紀像」製作風景

# 館蔵品紹介

## アメリカ軍投下ビラ



図1 アメリカ軍の航空機から徳島市に投下された降伏勧告のビラ(表)。

日本は、1941年(昭和16)からアメリカ・イギリスなどの連合国との間で戦争を開始しました。この戦争は、太平洋戦争と呼ばれています。開戦してまもなく日本軍は、重要な拠点をつぎつぎと失い、日本の本土近くまで後退していきました。

1945年(昭和20)7月26日、連合国は、日本に対して降伏の勧告を宣言しました。これはポツダム宣言と呼ばれています。

資料は、このポツダム宣言による日本への降伏勧告などが詳しく記されたビラで、アメリカ軍の航空機から、徳島市内に投下されたものです。資料の寄贈者・今枝靖雄氏によれば、このビラは、8月15日の敗戦の3日ほど前、同氏が吉野川下流の右岸堤防下(現徳島市住吉4丁目付近)の葦が生えた湿地帯で発見したものと



図2 ビラが発見された地点(印、徳島市住吉4丁目付近)、1:200,000地勢図。

われます。同氏はここで、2枚のビラを発見しましたが、「周辺には、これ以外にもビラが投下されていたのではないかと語っています。

ビラには、「日本の皆様」と題され、表と裏に、日本語でおよそ600字近い文字がビッシリと記されています。これによれば、8月10日、日本政府はポツダム宣言を受け入れる条件として、天皇を中心とする体制を保つという条件つきで降伏することを連合国に伝えています。しかし、連合国はこれを拒否し、無条件降伏をよく求めました。そして8月15日、日本は無条件降伏し戦争は終結しました。

このビラには、無条件降伏を求めた日本政府への通告文の発信日が8月11日と記されています。したがってこのビラは、8月12日から敗戦前日の14日までの3日間に、アメリカ軍の航空機から、徳島市に投下されたビラであることが推定されます。

太平洋戦争の末期に、アメリカ軍が日本に対して、都市の爆撃を予告した3種類のビラと、核攻撃を警告した1種類のビラを投下したことが、現在明らかになっています。しかし、ポツダム宣言による降伏の勧告などが記されたこのビラについては、現在、投下地域や投下軍団など、重要なことはまったく明らかにされていません。徳島市に投下されたこのビラは、恒久平和を求めるためにも、きわめて貴重な資料であると考えられます。(歴史担当: 山川浩實)



図3 ビラが発見された吉野川下流右岸の堤防下。画面右上の白い建物(老人福祉施設「白寿会」)の堤防下付近。

## Q。石を割った面にシダの葉のような模様がついて いることがあります、それは化石ですか？

一見がんにょうそうに見える岩石にも、圧力を受けたり、膨張・伸縮のくりかえしによって、たくさんの割れ目(節理)が発達しています。岩石は、こうした割れ目に沿って割れやすくなっています。

岩石の割れ目のすき間には雨水や地下水がしみ込むため、水中に溶けているミネラルが沈殿します。割れた岩石の表面が褐色に色づいていることが多いのは、酸化鉄(褐鉄鉱)の沈殿物が付着しているためです。割れ目に沿って割れた面(節理面)にはまた、シダの葉のような形をした黒色の模様が見られることがあります(写真)。「しのぶ石」、「樹形石」あるいは「模樹石」とよばれているものです。「しのぶ石」とは、形がシノブ科のシダの葉に似ていることからつけられた名前です。

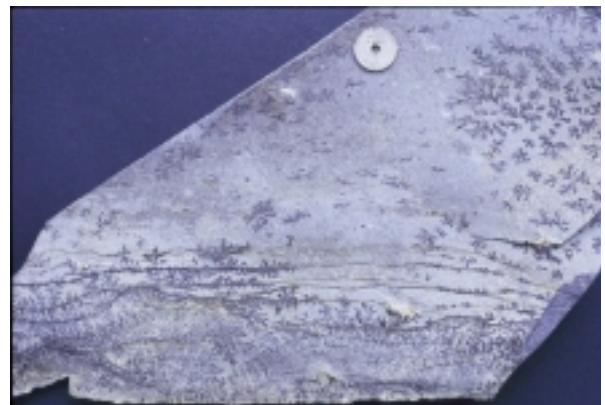
文化の森の野外劇場から知識の森へ上る石段には、板状に割れた火山岩(おそらく香川県産の安山岩)が使われていますが、以前はこの石にも同様な樹形模様がたくさん見られ、「植物の化石ですか？」という質問を何度も受けたことがあります。造成から10年以上もたったので石の表面にはコケが生え、今ではほとんど見えなくなっていました。

それでは、しのぶ石は化石なのでしょうか？化石は大昔の生物の遺骸または生活の跡が残ったものなので、たいていは泥岩や砂岩、凝灰岩などの堆積岩の中に入っています。マグマが冷えて固まった火成岩や、もともとの岩石が変化してできた変成岩の中には、よほどの例外を除いては入っていません。植物化石の場合は、木の葉などが流されてきて堆積物中に埋もれて化石になるので、地層の中の堆積物の粒子の並びに平行に入っているのが普通です。

こうした化石の一般的な知識を頭に入れて、もう一度しのぶ石のついた岩石を観察してみましょう。しのぶ石が見られるのは、岩石の節理面に限られるということにまず気づくと思います。新しく割られた新鮮な面には決してついていません。また節理面なら、一定方向の面だけでなく、様々な方向の面にしのぶ石ができていることにも気づくでしょう。更に、しのぶ石は、火成岩でも堆積

岩でも、どんな種類の岩石でも見ることができます。しかし、きれいな樹形模様が出来るのは、泥岩や火山岩など、きめの細かい岩石です。

以上の説明でおわかりのように、しのぶ石は化石ではありません。それでは正体は何かというと、マンガンという元素の酸化物、すなわち軟マンガン鉱(MnO<sub>2</sub>)です。正確には、水マンガン鉱(MnO(OH))の結晶の中味が軟マンガン鉱に置き換えられたもの(仮晶)です。マンガンは重金属の中では鉄に次いで量が多く、広く分布する元素です。マンガン鉱物自体は近辺にはそう多くは存在しませんが、マンガン元素は鉄と似た大きさで性質も似ているため、鉄を含む鉱物の中にもわずかながら混じって存在しており、それが溶けだして酸化し、しのぶ石をつくるものと考えられます。しかし、マンガン酸化物が成長する際にどうして樹形状の形をとるかは、詳しくはわかりません。(地学担当：両角芳郎)



サヌカイト質安山岩の節理面に見られるしのぶ石  
(上：標本全体、下：左下部分のクローズアップ)

